パーマネントコース報告

養老の滝」にカンパイ

養老の滝コース 岐阜県養老町

大高竜亮

歴史に出会えるコースももうすぐ閉鎖。36年もの間ありがとう。

養老の滝」コース 岐阜県 No.5
JOA公認 No.57 10km 10ポスト

養老の滝コースが閉店

年度末を迎えると、パーマネントコース閉鎖のニュースが報じられることがしばしばあります。昨年度は栃木県「佐野唐沢山」や群馬県「上州一ノ宮」「湯の丸高原鹿沢」、静岡県「金谷」が長い歴史の幕を下ろしています。そして今年度は、岐阜県「養老の滝」コースが3月末をもって終了となります。開設は昭和47年ですから、36年ものあいだ、オリエンテーリングファンを楽しませてくれたことになります。

全国チェーンの総本山？

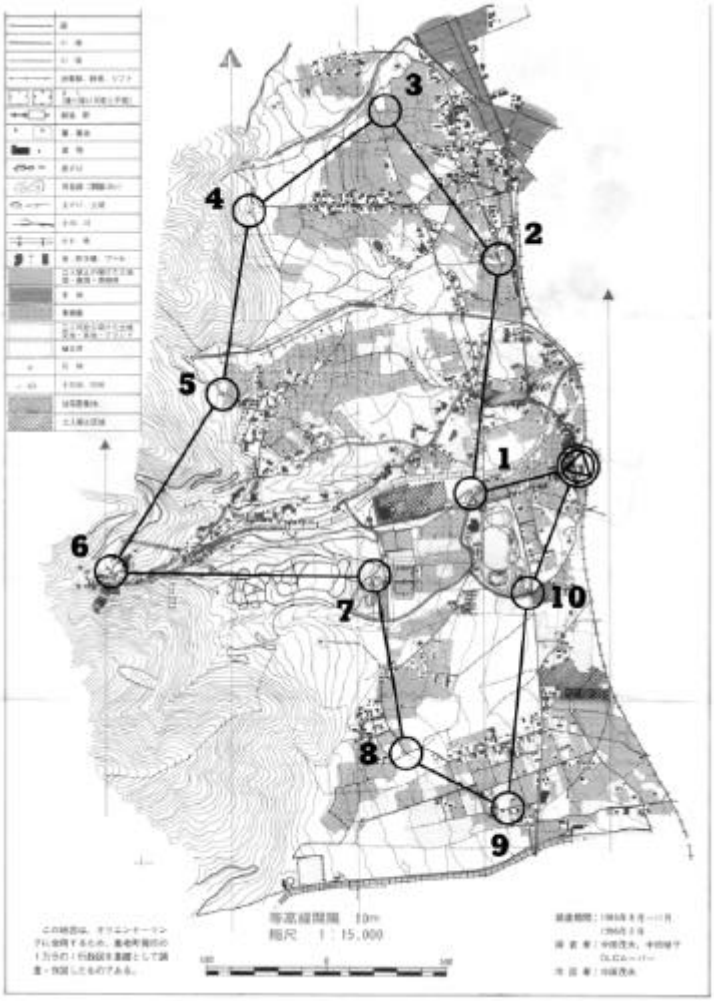
コースがあるのは岐阜県南西部にある養老郡養老町。日本で唯一、エリアが三分割される「二重飛び地」というという珍妙な構成の大垣市に挟まれる形のロケーションで、南端は三重県とも接しているところです。標高859mの養老山麓を巡る比較的平坦なコース設定で、ハイライトはコース名にもなっている「養老の滝」。

今では居酒屋チェーンの「養老乃瀧」の方がすっかり有名になっている感があり、本家本元がここであることは案外知られていないようです。「日本の滝百選」や「名水百選」にも選ばれている名瀑であり、鎌倉期に記された『古今著聞集』にある、滝の水がお酒になるという「養老孝子伝説」は親孝行話として今も語り継がれています。

PCめぐりは道づれ

現地へは、ＪＲ東海道本線「大垣」駅から、昨年10月に近鉄から運営を引き継いだばかりの養老鉄道に乗り換えます。近鉄の100%出資会社ということもあり、近鉄時代の車両がそのまま走るローカル線。18分間乗ると、スタート地点の「養老」駅に到着します。

このコースの踏破は90年2月以来2度目。18年ぶりの再訪です。数多くの瓢箪が吊り下げられたホームから改札を抜けると以前と変わらぬ案内板が駅前に置かれています。ただし、マスターマップの掲示はなし。駅の窓口でマップを求めようとすると、珍しく2名のオリエンティアの先客がいます。ご夫婦らしく、地図を入手後さっそく言葉を交わすと、コースがなくなるというので回りに来たとのこと。私が埼玉(＝実家)から来たというと、「もしかして大高さんですか」との返事にこちらもびっくり。私が運営するホームページをご覧頂いているそうで、思わぬ出会いとなりました。このお二人、各務原市にお住まいの林武彦さんご夫妻で、ご主人は岐阜県協会のお仕事もされているそうです。しばらく立ち話をしたのち、一足先にスタートします。マスターマップは現地で手に入れることができないため、前回のものが頼りです。



いよいよコースへ

まずは駅前から緩やかな上り坂を西に進みます。ほどなく「岐阜県こどもの国」の入口にさしかかると、ＰＣの案内板が再び姿を現します。こどもの国事務所でも地図の取り扱いがあることからの措置のようで、この案内板にもスタート地点はあくまで養老駅であることが記載されています。第1ポストは以前とほぼ変わることなく植え込みの横に立っています。前回は、開設当時のコースから大きな変更が行なわれてさほど経っていない頃で、ポストは汚れ1つなくピカピカ。18年経過した今回もプラスチック製が幸いして、鮮度をしっかり維持しています。

こどもの国入口に近い第1ポスト

北に方向を転じ、住宅が点在するエリアを抜ける舗装道路を進みます。五叉路を過ぎ、一本道を直進すると、何の変哲もない住宅地の一角で第2ポストに出会います。かつては、放し飼いにされた犬がうるさく吠えていた北側の空き地も新しい家が建ち、ポストも1面が破損しているなど、ここは様変わりが顕著です。

北西に向かうルートから第３ポストを目指します。「仏壇」という大きな看板のある建物の前の突き当りから北に進むと、ルートもパーマネントコースらしい里道へと変わっていきます。ポストのあるはずの分岐につくと、これがなかなか見当たりません。うろうろと探しているうちに、走ってやってきた林さんご夫妻に追いつかれます。３人でしばらく探すと、「ありました」との声が分岐の東側を探していた主人の武彦さんから上がります。写し取っていたマスターの位置がずれていることが、探しあぐねた原因なのですが、自宅に帰って18年前の手書きレポートを振り返ってみると「50m入った林と畑の植生にちょっとぶっ壊れたポストが立っていた」との記載がありました。当時も探し回ったうえでやっと見つけていたようです。ズレを手直しする前のマスターをそのまま持ってきていたので、同じ轍を踏む羽目になりました。ちなみに「壊れた」とある、破損部分は今もそのまま同じ形で欠落しています。ここからは私の徒歩ペースに林さんご夫妻も合わせてくれて、３人で最後まで回ることとなりました。

第４ポストへの歩き始めは、前回「ちょっと荒れていた」ので回避した西へ向かう小道に突入。廃道に近い状態ながら、草のないこの時季は問題なく通過することが可能です。沢沿いに走る道に出たあとはスイスイ。上り坂から南へ転じると緩やかな下りとなり、「柏尾山柏尾寺址」に到着。奈良時代の創建で、のちに織田信長によって焼き払われたと伝えられています。50m手前にある「千体石仏群」は、明治期に発掘された石仏がサークル状に安置されており、見所のひとつになっています。ポストは寺址境内にやや首をかしげて立っています。

柏尾城址の千体石仏群

前回は、このあたりからパンパンと散弾銃でも撃っているかのような乾いた音が間断なく聞こえてきました。警戒感を募らせながら歩くことしばらく…。林業に従事されている方が間伐した枝を焼いている姿が目に入り、胸を撫で下ろしたことを覚えています。

山裾を回り込むように西に向かい、涸れた沢に差し掛かります。地図とはやや異なるルートを進み、沢を越えると「白石薬師堂」に到達。片隅にあるポストも以前と変わらず迎えてくれます。

第６ポストまでは一転して観光ムードに包まれます。林を抜け出し、街中に入るとまず目にとまるのがいのしし鍋屋にずらりと吊り掛けられた鹿のシャレコウベ。ご愛嬌にもサングラスまでかけられたものもあり、広告塔なのか、アートなのか、単なる悪趣味なのか微妙なところ。

観光ホテルも散在し、遊歩道もしっかり整備されていることから、鄙びた雰囲気はありません。途中、「菊水霊泉」では名水百選のおいしい水をポリタンクに汲み取る来訪者の姿も見られます。ちなみに、お酒になったのは養老の滝ではなく、この菊水泉という説もあるそうです。滝まで楽にアプローチするための観光リフトもあるのですが、この日は運休している模様でした。小雨の降り始めるなか、坂道を上り詰めると、勢いよく飛沫をあげる勇壮な佇まいの「養老の滝」が目の前に現れます。落差 32m、滝幅４mと、大きすぎず、小さすぎず、伝説を残す滝に相応しい神秘性を感じさせる趣です。

かつて滝壺近くにあった第６ポストは 70mほど北寄りの小道の曲がりに移設されていました。

出戻りで第７ポストへ向かいます。養老キャンプセンター周辺の入り組んだ道の片隅にかつて倒れていた初代コースのポストは今も健在です。ただ、18 年前は紅白の鮮明だったポストもすっかり赤錆に包まれ老朽化が進んでいました。この 18 年前と現在では第７ポストの位置が異なっています。かつてのポスト位置は「養老パークゴルフ場」となり、立ち入りが制限されています。当時、頭の落ちていたポストもパークゴルフ場の入口付近に移設され、問題点もなく直立しています。

第８ポストへは南へ一直線。等高線に沿ったゆったりと歩ける平和な道を進むと、石碑の前にあるポストが遠くからでも確認できます。以前は木にもたれかかる様にして立っていたポストも、更新された上で立て直されています。

養老の滝

続く第９ポストも更新されています。第８ポストから格子状に道の整備された一角を進むと道端にひょっこり立っているのは以前と同じですが、記号はかつての「N」から変更されています。しかも目の前には水色の外装をした真新しい戸建住宅があり、景色もすっかり様変わり。時代の変遷を見続けてきたポストも間もなくここから姿を消すことを思うと、改めて残念な思いが募ります。

そして最終ポスト。ここは主要道路に沿ってただただ北に向かうだけ。約１㎞歩くと、こどもの国の南端に着き、前回より丈の短くなった最終ポストを確認します。

地図にあるゴールまでの最短路はなぜか分からず、第１ポストに向かう際に歩いたルートに出るまで引き続き進み、養老駅へ戻ることに。と、ここでちょっとしたアクシデントに見舞われます。３人で談笑しながら、駅までもうすぐというところまで来たとき、道路にあった窪みに気づかず足を取られ横転…。捻ったかな、という嫌な予感は的中し、その後、足首は腫れ上がるばかり。湿布とサポーターの手放せない正月を迎えることとなってしまいました。

林さんご夫妻とは岐阜までご一緒し、その後もメールで情報交換をするお付き合いをさせていただいています。

残りわずかとなった「養老の滝」コース。私たちを待ち続けてくれたポストに、会いに出かけてみませんか。

（2007 年 12 月 29 日 踏破）

（大高竜亮）